

近代日本の進化論と宗教

クリントン・ゴダール

はじめに

本発表では、拙著 *Darwin, Dharma, and the Divine: Evolutionary Theory and Religion in Modern Japan* (Hawaii University Press, 2017, 碧海寿広訳『ダーウィン、仏教、神——近代日本の進化論と宗教』人文書院、二〇二〇年) を総合的に紹介し、最近の進化論史研究を取り上げながら進化論史の新たな方向の提供も試みる。

拙著概略

学問的な背景

チャールズ・ダーウィン『種の起源』の出版から、主要論点になったのは、その宗教的な意義（主に創造説と進化論との対立）と政治的な意義であろう。その議論は今も続いている状態であり、進化論史の分野では、進化論の背景とその展開、進化論と倫理、哲学などの問題も多く議論されている。ただし、一般的には、科学史の分野は西洋中心主義に支配されていたといっても過言ではない。だが、数年前から西洋中心主義への批判が浮かび上がり、科学史が大

大きく再考されるようになった。当然かもしれないが、進化論史も主にイギリスのチャールズ・ダーウィンとヨーロッパの進化思想が中心であった。しかし、進化論が世界の諸地域に伝播されると、その受容には様々なバリエーションが生じた。⁽¹⁾ 非西洋の世界では進化論がどう受け入れられたのだろうか。その理解がなければ、「進化論と宗教」や「進化論と政治」について、少なくともその思想史は理解できないだろう。上述の問題を考慮しながら、著作では日本における進化論の受容の歴史に新しい光を当てようとした。

進化論の日本受容の「定説」

日本における進化論受容という問題は、これまで十分に研究されたとはいえないが、「定説」があつたと言えるだろう。その定説を三つの側面ですべてまとめたいと思う。

まず、宗教的な側面がある。西洋諸国と異なり、非キリスト教国の一つである日本の宗教思想家たちは、進化論が意味するところについて、おおよそ興味も関心も持たなかった。この語りによれば、進化論は何の問題もなくスムーズに受容された。あまりにも分かりやすい説であり、それは近代日本の宗教史の分野で最近まで進化論が見過ごされてきた理由であるだろう。これは一つ目の神話である。

次に、政治的な側面がある。進化論は主に「社会ダーウ

イニズム」の形態で、国家のイデオロギー・進歩主義・植民地主義・戦争肯定論を支えてきた。これは二つ目の神話である。

最後に、時代的な側面として、進化論は主に明治時代の現象として捉えられる傾向がある。その結果、明治時代の進化論（スペンサー、自由民権運動など）の研究はあるが、大正・昭和時代の進化論についての研究が極めて少ない。こういった「定説」が日本進化論史研究を妨げたといっても過言ではない。英語圏の日本研究でも同じような定説がある。

「定説」を考え直す

出発点としては、まず進化論の（政治的・宗教的・思想的）多面性を認識することが重要である。日本でも、自由民権運動家、国家主義者、社会主義者、キリスト教者、アナキスト、仏教者、科学者が進化論を強調した。その上、「進化論」は一枚岩ではなく、自然選択説、ラマルキズム、ベルクソン、クロポトキンの相互扶助説などがあつた。ただし、このバリエーションの中に「パターン」を見極めようとすることも重要であろう。

宗教的な側面において、欧米と比較すれば、確かに創造論は相対的に小さな役割しか果たさなかったが、日本でも

反進化思想があつた（例えば西村茂樹、佐々木高行、黒川真頼、石川三四郎、紀平正美など）。創造説を主張しない仏教者の間でも進化論は議論されたのであり、近代日本において進化論は多く議論されていた事実がある。明治時代の一つの例を取り上げると、仏教学者の島地大等は、明治時代の宗教史を振り返って、次のように主張している。「維新後、新来の所謂泰西の知識が、仏教々学上に一時強烈なる刺激を与へた事は勿論であつた。其の最初の衝突は地動説・須弥説の争、即ち天文の問題に始まり、唯物論的無神論より、進化論に立てる科学的知識との衝突にも悩まされたものは独り基督教計りではない²⁾」。

進化論が日本にもたらした論争の本質を理解するために、まず、進化論の受容か、さもなければその拒絶と創造論信仰か、といった考え方から離れる必要がある。換言すれば、創造説・進化説の二分論を乗り越える必要がある。

次に、日本での進化論受容を研究するためには、進化論思想（科学思想）と宗教思想の展開をめぐつての相互作用に注目することが重要である。日本への進化論の伝播について理解するには、宗教や、宗教に裏付けられたイデオロギーの側面を見過³⁾してはならない。

具体的な例を取り上げよう。エドワード・S・モースの進化論についての公開講演（一八七七年）は広く知られてい

る。モースの講演は、科学思想の一般人向けの講義であつたが、同時に反キリスト教活動のパフォーマンスでもあつた。モースの公開講義はわざと日曜日に開催され、東京に滞在したキリスト教宣教師の多くが憤慨した。モースの弟子の市川千代松がその講義を訳した『動物進化論』（一八八三年）の冒頭には、「天地覆載ノ間、森羅万象無数ノ事物ヲ講究スルニ、其最先ンズ可キモノハ論理ニアリ、其真理ヲ討究シテ後、之ヲ事実ニ比較シ、其果テ附合セルトキハ、其論理ヲ称シテ正実ナリトナスベシ。宗教家ノ如ク事物ノ解シ難キモノニ逢ヘバ、是天帝ノ所為ナリ、是天神ノ賞罰ナリト言做テ、其理ヲ考究セズ、単ニ神力ノ不可思議ニ託委シテ、空説ヲ主唱スルノ理アラシヤ」とあり、石川は振り返って「先生の説かれた事は又当時基督教の迷信から我日本人を救つたものである」と述べている³⁾。モースは彼の後任にキリスト教徒が選ばれないよう差配した。日本を去つた後、モースはチャールズ・オーティス・ホイットマン（一八四二―一九一〇）を後任に選出する。彼は一八七九年から一八八一年まで日本に滞在した。モースは後に、ホイットマンを選んだのは、彼が教会に一度も行ったことがなく、非信仰者を自認しているからである、と説明している。同じく、モースが推薦したアーネスト・フェノロサも進化論に基づいた反キリスト教を主張した。

要するに、日本における進化論は、最初からキリスト教の評判をおとしめるための理論として提示された。だが、多くのキリスト教者が積極的に進化論を主張し、またキリスト教と対立した井上円了のような近代仏教者がキリスト教と進化論との「衝突」を論じ、仏教と進化論の調和を論じ始めた。仏教による進化論の取り込みは、近代化に駆り立てられる日本の一般的な空気だけでなく、キリスト教との競合という文脈もふまえて理解すべきである。キリスト教徒と仏教者はどちらも、相手が非科学的な信念を所持しているとは非難し合った。それにより、両者ともに進化論を取り込むよう刺激され、両者が日本での進化論受容とその伝播に貢献した。

では、日本での進化論をめぐる主たる論点はなんだったのか。進化論は生存競争を含蓄するかという問題がある。日本で宗教的な論争を呼び起こした、進化論の含蓄とは何だろうか？ 二つの際だった問題がある。第一に、自然選択の理論には、「生存競争」という物議をかます考え方が付いてくる。もし自然界の核心にこの闘争があるというのなら、道徳なるものはすべて無意味か、あるいはその闘争の一部に過ぎないのだろうか？ 真の社会とは、実のところ、利己的でバラバラの個人の集まりに過ぎないのか？ 道徳は常に相対的なものと

考えたほうがいいのか？ 社会の調和や儒教倫理が何世紀ものあいだ推奨されてきた国で暮らす、多くの人々にとつて、自然界のまさに核心に存在するこの「生存競争」という妖怪は、恐怖に感じられたのである。^④

政治的に、国家間の競争を唱えた声が多くあったが、生存競争的な社会観は国体思想との緊張関係があった。例えば、政治家の佐々木高行が「進化論より見たる我が帝国」という論文において「争は実であるが、平和は虚である。人間の歴史は殆ど戦争の記録で満たされると断言してをる位のものである。成程それはさうであるかもしれないが、これでは人間も全く一般生物界から超越した美しい点もないやうであるが、其うちでも成るべく無名の戦争も挑まず、異人種だといつて虐待もせず、頗る社会の秩序を重じて、国体相互の利益を妨げず、而して上下の階級をよく守り、道義規律の基礎の上に、優美高尚なる性格を發揮して、上和下睦、国家は一の家庭の如くに、相親しみ相敬ひ、又相倚り相頼みて、古今に亘り中外を通じて、尤も麗はしく尤も厳かに、社会国体を組織するのが、是れ我々の理想とすべき所であらう（中略）この優麗なる国体の国は、即ち吾々の今住んでをる日本帝国其者であるのである」と述べた。^⑤

第二の問題は唯物論であった。明治以降、日本のほとんどの宗教思想家たちは、進化には同意したが、唯物論の発想（還元主義）には同意できなかった。「これは単に哲学的な問題であるだけでなく、社会や実際の暮らしにも関わる深刻な事態であった。一九世紀後期より以降、多くの日本人は、日本の発展や科学技術の進歩を歓迎する一方で、冷徹でひたすら合理的かつ功利主義的な世界観が、社会を破壊に導くのを恐れた。こうした懸念の裏側には、日本が近代資本主義社会に移行するなか、社会が大変動し、旧来の社会的な絆が失われたことがあった。脱魔術化の妖怪や、社会的な絆の喪失に直面した多くの宗教関係者は、現状に対応するため、十分な意味や道徳や聖性をそなえつつ、進化も何らかのかたちで考慮に入れた世界観を打ち立てるよう促された。多くの人間は、自然の聖性を認める見解が、道徳的な社会の支えにもなるだろうと期待したのである」⁶。例えば、仏教哲学者の井上田了は、唯物論について「コレラ病よりも害毒」とまで主張した。進化とは一体の物質の分化のような西洋の唯物論とは異なり、仏教に基づいた生命主義的な進化論を唱え、宇宙全体もまた一活物なると考えた。

政治的・イデオロギー的な側面

まず「社会進化論」という概念について述べる必要がある。英語の“Social Darwinism”と同じように、（有賀長雄は例外だろうが）「社会進化論」は近代日本ではあまり使われていなかった。戦後からよく使われるようになり、ナチスと第二次世界大戦を背景にして「正当な」生物学的な「進化論」と間違った「社会進化論」を区別する含意がある概念であろう。ただし、こういった厳密な区別は一九世紀後半～二〇世紀前半には存在しなかった。「日本近代史の研究者たちは、「社会進化論」という言葉を、無批判に、歴史の文脈も踏まえずに用いてきた。そう言っても過言ではない。進化論の歴史研究の分野では、この言葉（社会進化論）が戦前の状況に対する戦後からの誤った認識に基づくものであったことが、次第に明らかになりつつある。すなわち、戦前の体制への反動として示されたこの言葉は、進化論が実に広範な文脈で（たとえば社会主義者にもアナキストにも平和主義者にも）政治利用された事実を、見えにくくしているのだ」⁷。

近代日本における「進化論」は、どのような政治的・イデオロギー的な「立場」であったのだろうか。宗教的な側面を見るならば、進化論が最も物議をかもし、論争の対象となったのは、二〇世紀はじめの数十年から一九三〇年代

にかけてである。つまり、進化論と国家イデオロギーの間の緊張関係の展開が見られる。大雑把に纏めると、明治中期には、自由民権運動やスペンサーに関する議論及び加藤弘之と仏教者の間の「唯物論論争」があり、明治後期からスペンサーへの反発、そして明治後期から（平民社の）社会主義者とアナキストによる進化論の取り込みがあつて、日本における進化論が「左旋回」するのである。大正期から昭和初期にかけて、「左」の進化論と社会主義の関係が強くなる一方、「右」の反進化論運動（紀平正美）が行われる。同時に、「ユートピア的な進化論」（北一輝・賀川豊彦・日蓮主義など）が登場し、現存の国家や社会と異なるユートピアを想像する。

おおまかに言えば、戦前の日本の進化に対する宗教的なかわり方は、まずもって、一九世紀後半の全面的かつ熱狂的な取り込みから始まる。そして二〇世紀初期から、次第に二極化や懐疑的な態度の方へと向かった。これに続く一九三〇年代から四〇年代には、進化論と自然選択に対する短い期間の宗教的バックラッシュが見られるも、そこには宗教と進化を調和させる試みの歴史も付き添った。⁽⁸⁾

反進化論者として、主に大正・昭和初期の国体思想家である寛克彦、紀平正美、上杉慎吉、平泉澄などが挙げられ

る。

紀平正美は学生の間の左翼思想を弾圧するため、文部省直轄研究所の国民精神文化研究所で積極的に活動し、進化論も教育の世界で禁止しようとしたのである。紀平は戦前日本の反進化論の第一人者となつたのであり、例えば一九三六年一月に行つた講演「日本精神と自然科学」では、「少なくとも日本人であるならば猿だの或は猿と人間との中間のもの（その何たるかを知らず）更に下等動物だと言ふ者はないと思ひます。個人主義的に長く訓練せられた人間にはそんなことはどうあつても問題にはならないからよしい。例へばアメリカ人には己が祖先が英人であるか、スコットランド人であるか、独逸人乃至伊太利人であるかは最早問題でないであらうと思ひます。然るに我等日本人では大問題であります。我等の国土一切が伊弉諾伊弉冊両尊の産み給ふところのものであり、我々の祖先は神であるからであります」と述べている。

著作の中心的な論点

もし私たちが、創造論と進化論だけにこだわる論争や、「受容」もしくは「拒絶」という無思慮な固定観念を越えた視点を獲得できれば、次のような見通しが得られる。すなわち、日本での進化論の宗教的な受容のさ

れ方は、自然界を、心ない「生存闘争」の法則によって支配された、冷たい唯物論的な世界とする発想への、長く続く恐怖によって規定されていた。その嫌悪感、急速な近代化によってもたらされた、社会変容に対する気がかりの反映でもあった。この恐怖感があつたからこそ、多くの宗教思想家や哲学者や生物学者が、進化論に積極的にかかわるよう駆り立てられ、そして善や調和や美や、あるいは神聖な存在を、自然や進化の内側に見いだしていった。まさにその恐怖感の後押しのもと、日本近代思想史の少なからぬ部分が形成され、また日本人の自然観や社会観や、聖なるものに対する理解も変化したのである。⁹⁾

日本の進化受容・理解の「特徴」はあるのだろうか

自然選択説は、ヨーロッパの生物学者たちからも懷疑の念を被った。だが、競争を中心的なメカニズムとすることなく進化を理解しようとする試みの長い歴史は、日本でこそ際立っている。井上円了、賀川豊彦、北一輝、石川三四郎、紀平正美、今西錦司、彼らは皆、それぞれ異なる方法で、バラバラの個人主義と、生物学や社会学で語られる大きな全体のあいだにある緊張関係を緩和し、そして、自然を本質的に善と調和のイ

メージのもとに描こうとした。こうした注意の向け方は、自然を本質的に道徳性の欠けた闘争の場として描く思想が持ちうる社会的な含意への、長く続く強い不安の反映であった。それはまた、政治的な闘争と絡み合った不安でもある。日本の進化思想に顕著なのは、生物学の社会学への応用ではなく、社会・政治的な理念の、自然への送り込みである。／日本の思想家たちが変わらず関心を抱いたのは、創造、種の変化の思想、人間の出自は動物であること、といったものではない。そうではなく、進化論が連想させる形而上学的・倫理的・社会政治的なものが問題であった。具体的には、自然選択説に見て取れる唯物論、決定論、そして個人主義の想定と、「弱肉強食の自然」という妖怪が、いずれも深い不安を彼らに呼び起こしたのだ。言い換えると、ダーウィンによる世界の脱魔術化と感じ取られたものは、世界の他のどこよりも、日本でこそ大きな脅威となったことが明らかになった。¹⁰⁾（〆は改行）

おわりに

最後にアジアの諸国との比較及び新たな方向を取り上げたい。今後必要なのは、西洋諸国とアジア諸国を含めての

本當のグローバル・ヒストリーであろう。二〇一五年の *Global Spenserism: The Communication and Appropriation of a British Evolutionist* と二〇二〇年に出版された編著 *Asian Religious Responses to Darwinism: Evolutionary Theories in Middle Eastern, South Asian, and East Asian Cultural Contexts* が重要な研究成果である。今後、「グローバル・ベルクソン」や「グローバル・クロボトキン」などの研究が登場すれば、進化論の新たな世界史が現れてくるだろう。進化論と宗教の世界史については、少なくとも、進化論と宗教思想との関係は決して西洋諸国あるいは一神教のみの問題ではないだろう。インドと中国でも、進化論が議論され、同じく唯物論的・非目的論的な進化論が問題視されてきた。

もう一点は、科学思想・進化論を受け入れて、同じような戦略を利用したパターンが見られることである。例えば、西洋の科学思想は、すでに自国の思想にあった、という戦略であり、インド、中国、日本の思想家の間に見られるパターンである。また、教義的な背景と内容が異なっても、共通するパターンの例としては、インドのヒンドゥー教のオーロピンド・ゴシユと同時代の井上円了の間の共通点が目立つ。両者は、唯物論を否定しながら新たな進化論を展開しようとし、進化は単なる「進歩」ではなく、進化と

退化の循環（オーロピンドの言葉で、*“involution”* と *“evolution”*）であろうと論じる。オーロピンドと円了の思想にも、進化には精神的な側面と物質的な側面が両方ある。

最後に、二〇世紀初め頃からグローバルスケール（人類全体）についてのユートピア的な進化論が世界中に現れていることにも注目したい。例えば、インドのオーロピンド（*The Life Divine*）、中国の僧・太虚の弥勒菩薩の世界、フランスのテイヤール・ド・シャルダン（人間は究極点であるオメガ点（ Ω 点、Point Omega）へと進化するという思想）、日蓮主義者の世界統一などがある。

今後、日本とアジア諸国の進化論思想をグローバルな思想史の中に位置づけるのが大きな課題になるだろう。

注

- (1) 例えば、ハーバート・スペンサーのグローバル・ヒストリー (Bernhard Lightman, *Global Spenserism*, 2015)、中東の進化論受容については Marwa Elshakry, *Reading Darwin in Arabic, 1860-1950* (2013)、インドのヒンドゥー教と進化論については C. Mackenzie Brown, *Hindu Perspectives on Evolution* (2012) などがある。

- (2) 島地大等『思想と信仰』（明治書院、一九二八年）二四六頁。

- (3) 『石川千代松全集』四卷（興文社、一九三五年）
一一二頁。
- (4) クリントン・ゴダール（碧海寿広訳）『ダーウィン、
仏教、神——近代日本の進化論と宗教』（人文書院、二
〇二〇年）二二二頁。
- (5) 佐々木高行「進化論より見たる我が帝国」（『全国神職
会会報』一〇五号、一九〇七年七月）二四八頁。
- (6) 『ダーウィン、仏教、神』二四頁。
- (7) 同前、二五～二六頁。
- (8) 同前、三〇八頁。
- (9) 同前、一五～一六頁。
- (10) 同前、三二二～三二三頁。

（東北大学准教授）